

2019 年度の活動報告

夏休み、冬休み、春休みの勉強会

2019 年度も、夏、冬、春の長期休みに、勉強会を開催しました。新潟県ろうきん福祉財団様の助成による事業です。毎回5, 6人くらいの外国につながる児童生徒が来て、宿題や日本語の勉強をしています。休憩時間は公園でサッカーしたり、部屋でカードゲームをしたりして、交流をしています。てらこや新潟の社会人、学生、留学生のボランティアも、楽しく勉強と遊びのサポートをしています。リピーターも多いですが、新規に来る児童生徒もいて、勉強会の存在意義が再確認できました。



夏休み勉強会と冬休み勉強会の様子



漢字クイズを出し合っているところ



書き初めの宿題を手伝ってもらっているところ



休憩時間はサッカー！

新潟日報で紹介されました。

2019 年4月から入管法が改正され、新しい在留資格「特定技能」が創設されました。特定技能2号の在留資格があると、家族と一緒に日本に住むことができるので、日本語がわからない子どもが多く来日する

ことが予想されるということもあってか、マスコミから取材を受ける機会が多かったです。記事になったものはこちら(↓)からお読みいただけます。

[読売新聞新潟県版 2019年1月19日の記事を読む](#)

(PDF が開きます)

[新潟日報 2019年4月1日の記事を読む](#)

(PDF が開きます)

[新潟日報 2019年5月12日の記事 ↓](#)

新潟日報2019年5月12日 Column

座標軸  外国人の子ども

外国人の子どもたちに日本語を教えている新潟市の団体「りてらこや新潟」の代表 佐々木香織さんから、間もなく刊行するという冊子をいただいた。

タイトルは「二元『外国につながる子ども』の奮闘記」。「外国につながる子ども」とは、親が外国出身で、外国の言葉や文化を持つ子を指している。

冊子では、かつて県内の学校に通っていた若者9人を佐々木さんがインタビュー形式で紹介している。日本に来て、どう学んできたかなどが率直に語られている。

中でも母親がフィリピン人の男性の話には心を打たれる。

日本の小学校に4年で転入し、1年生の漢字ドリルを必死にやっていた。高校ではいじめに遭い、1年留年した。

卒業後はコンビニでバイトをして、フィリピンにいる妹の学費に充ててきた。進学して、自動車整備士になるのが夢だが、「まずは妹を卒業させてから」と話す。懸命に生きる姿が伝わってくる。

人手不足を背景に、外国人労働者の門戸を広げる改正入管難民法が4月、施行された。県内でも外国人が増えそうだ。その子どもの姿もより身近になるだろう。

彼らを受け入れる態勢整備を急がねばならないが、それには今の実情を理解することが大事だ。

冊子はその助けとなる。佐々木さんは「日本で未来をつかもうと奮闘している姿を知りきっかけにしてほしい」と願っている。冊子については「りてらこや新潟」のホームページから問い合わせを。

(論説編集委員・山田孝夫)

受け入れを整えるために

『未来をつかむサバイバル元「外国につながる子ども」奮闘記』 お買い求めは[こちら](#)からどうぞ。

中国語版『探求未来生存之路 ——八位日本移民儿童的奋斗故事』 は[こちら](#)からどうぞ。